○○してみました世界のフィールド

撚りをかけて縄をなう。知恵を絞って竹を活かす

石山 俊
民博 プロジェクト研究員

縄と竹を存分に使ってみました

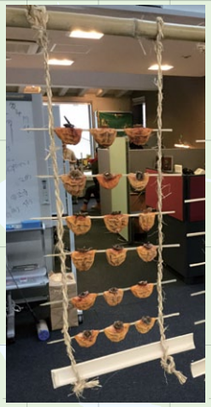
竹馬完成（左が筆者）

日本

1

3

2



4

5

日常生活のなかで見かける機会も少なくなった稲藁（いねわら）と竹。現在ではあまり使われなくなったが、これらの資源の価値はまだまだある。福井で習得した創意工夫の知恵を活かした、大人から子どもまで楽しく実践可能な資源活用術を紹介する。

福井県での農的暮らし

アフリカ乾燥地の農村を研究対象としてきたわたしには、ある引け目が常につきまとっていた。それは、わたしが農家の出身ではないということである。農業をほとんど体験したことがないわたしに農村や農民のことが本当に理解できるのだろうか。こんなコンプレックスを抱き続けていた。

そんなわたしに農村暮らしの機会がめぐってきた。場所は福井県の中山間地。古民家に住み、地域のNPO活動に携わった。活動内容には、稲作や野菜作りをとおした都市ー農村交流も含まれていた。こういったいきさつで、わたしの農的暮らしが始まったのである。

四年間の農的暮らしのなかで、近所の方々にたくさんの「農家の知恵」を伝授してもらった。そのうちのひとつが縄ないであった。

ワークショップで火がついた縄熱・竹熱

福井の農村を離れて一〇年、ふたたび縄をなうことになった。当時所属していた総合地球環境学研究所のオープンハウス（一般公開）で、縄ないワークショップをすることになったのである。同僚の調査地からもらってきた稲藁を使い、竹で組んだ稲架（はさ）がけを模した装飾の前でのワークショップは好評であった（写真1）。

ワークショップが終わっても、藁も竹もふんだんに残っていた。縄と竹を使った遊びが思い浮かんできた。

まずは、晩夏の流し素麺（そうめん）。支柱の竹を結ぶのも、木の枝から竹をつるすのも自家製の縄である（写真3）。次は秋の干し柿。これは福井の農村暮らしで覚えたものだ（写真4）。じつはこのとき入手した柿のヘタが短く、縄に直接かけることができなかった。そんな苦境を救ってくれたのが、地球研の縄ない仲間の知恵であった。竹串を柿にとおし、二本の縄にかける。和歌山県でおこなわれている方法らしい。

わたしの縄熱、竹熱は、周囲の知れ渡るところとなり、ある日ふたつのリクエストが舞い込んできた。

縄と竹が広げるネットワーク

ひとつめは竹馬である。子どものために竹馬を作ってほしいとのことであった。さすがに竹馬を作るのは初めてであったが、試行錯誤の末、竹馬はやっとできあがった。竹馬に乗る桜子（ようこ）ちゃんの満面の笑顔。竹馬は今でも壊れずにいるだろうかと、ときどき思い返している。

ふたつめはバウム・クーヘン。某研究員の誕生日祝いに焼いてみたいとのこと。バウム・クーヘン作りも初めての体験であったが、知恵を出し合い、三時間にわたる格闘の末になんとか焼き上げることができた（写真2）。ちなみにこのとき使ったU字溝は、先のワークショップで、縄を柔らかくするための「たたき台」として使用したものだった。

使い尽くす楽しさ

縄と竹への情熱も冷めかけたころ、京都に雪が降った。屋根につもるくらいのまとまった量だった。このとき、突然思い出したのが福井の老人から教えてもらったことだ。「屋根雪を降ろす余裕がないときは、竹で軒先の雪だけ落としておくと端口（屋根の先端）が折れんですむ」。地球研の建物は少々の雪ではビクともしないのは当然である。しかし屋根の雪が「ドスッ、ドスッ」と落ちてくるのは多少耳障りだ。老人の教えを実践したのはいうまでもない（写真5）。

さあこれで縄と竹を存分に満喫したと思っていたのだが、最後に浮かんできたのが青竹踏み。竹を五〇センチメートルほどの長さに切って、希望者に配った。資源を余すところなく使った満足感とともに、わたしの縄と竹の物語はやっと収束を迎えたのである。

縄ないと竹で養った資源利用の実践感覚。これからのフィールド調査に役立つことを願うばかりである。